

高校生の進路選択を考える

第6回

このコーナーでは、社会が変化し、大学教育・高校教育・大学入学者選抜も変わっていく中で、高校生の進路選択、高校での進路指導はどのように変わっていくのか、考えていく。

今回は、神奈川県立藤沢清流高等学校キャリア支援グループのリーダーである、小島昭彦先生にインタビューした。小島先生は、長年のご経験からのアドバイスに加え、各種のアセスメントも参考にしながら、生徒に広い視野をもたせ、やりたいことや適性を考えさせるキャリア教育を実践している。さらに近年は、社会に出てから求められる汎用的な力（ジェネリックスキル）の育成にも力を入れており、アクティブラーニング型授業による組織的な授業改善や、リーダーシップ教育の導入・推進にも取り組んでいる。

そうした、学校の教育活動全体を通じたキャリア教育において心がけていることについて、お話しいただいた。

CONTENTS

神奈川県立藤沢清流高等学校

小島 昭彦 先生 p41

- ▶現在の興味関心だけでなく広い視野をもたせ、適性を考えさせるのがキャリア教育の第一歩
- ▶大学教員との直接の対話から大学での学びへの興味を深め、将来につなげる
- ▶学校全体でアクティブラーニング型授業とリーダーシップ教育に取り組み、ジェネリックスキルを育成

神奈川県立藤沢清流高等学校（全日制）

◇所在地：神奈川県藤沢市大鋸1450番地

◇沿革：2010（平成22）年 神奈川県立大清水高等学校と神奈川県立藤沢高等学校が再編統合し、開校。

◇学級編成：各年次普通科8クラス

◇生徒数：780名（男子382名、女子398名）
2017年5月1日現在

◇特色：キャリアをつくる・学びをつくる・生きるをつくる、の3つを柱とした教育をコンセプトとする、単位制普通科の高校。アクティブ・ラーニング型授業、（世界標準の）リーダーシップ教育を全国に先駆け、組織的に推進してきており、2・3年次では、生徒は興味・関心、進路等に応じ、100を超える科目から履修するものを選択している。また、校外講座、技能検定、ボランティア活動、就業体験活動、スポーツ・文化活動を卒業単位に含められるようにすることで、多様な学修の機会を広げている。

◇卒業生の進路：2017年5月1日現在 卒業生236名
・進路：4年制大学141名、短期大学18名、専門学校43名、就職3名、その他31名
・合格者の内訳（現役生、延数）：国公立大学8名、私立大学226名

高校の教育活動全てでキャリア教育を推進し 社会での活躍につながる学習と経験を積ませる

神奈川県立藤沢清流高等学校 総括教諭 小島 昭彦 先生



現在の興味関心だけでなく 広い視野をもたせ、 適性を考えさせるのが第一歩

—藤沢清流高校では、進路指導やキャリア教育をどのような方針で行っていますか？

本校では、学校の教育活動全てがキャリア教育だと考えています。そこで「自らの生き方・将来を考え、目標に向けて意欲を高め、自らの課題に向けて前向きに取り組む生徒を育成する」を目標に掲げ、3年間を通した「キャリア教育実践プログラム」を策定しています。このプログラムでは、ホームルーム活動、総合的な学習の時間、教科の授業、特別活動等を位置づけ、それぞれで生徒につける力の目標を決めて、組織としてキャリア教育に取り組んでいます。

—進路指導の場面では、どんなことを心がけていますか？

よくある進路指導のパターンに、将来就きたい職業を決めて、その職業につながる学部・学科や大学について調べさせるものがあります。しかし、高校生が知っている職業は世の中に何万とある職業のうちの一握りにすぎません。ですから、早くから職業をもとに将来を考えると選択肢を狭めてしまうことになりかねず、この仕事が面白そうだと安易に進路を決めるのは、少し危険だと思って

います。そこでまずは、視野を広げることが大切だと考えています。

そこで本校では、2016年度から河合塾の「学びみらいPASS」を導入し、各人のタイプや職業適性、学問適性などを診断する「R-CAP for teens」を活用しています。

「R-CAP」は1年次の春に受けませんが、この結果、それまで興味関心をもっていなかった職業や学問に適性があるとの診断が出ることがあります。そこで私は、職業適性や学問適性のトップテンのうち、予想外だったり知らなかったりした項目に印をつけさせて、その職業や学問について、調べるように促しています。

また、1年次の春には「学びみらいPASS」のジェネリックスキルを測る「PROG-H(Progress Report On Generic skills)」と、英語・数学・日本語の学力を測る「Kei-SAT (Kei-Scholastic Assessment Test)」、セルフチェックによって学習生活パターンを測る「LEADS (Learning Attitude & Daily Survey)」も受けます。4つのテストをリンクさせた分析結果も出ますし、生徒にとって想定外の結果が出たり、「ここに力を入れると自分をもっと伸ばすことができる」といった指摘をされたりするので、適性や可能性に対する先入観が取り払われ、生徒が自分を客観的に見つめるよい機会となっています。

大学教員との直接の対話から 大学での学びへの興味を深め、 将来につなげる

—大学や学部・学科選びについては、どのような指導をされていますか？

本校は単位制高校のため、1年次の夏休み明けまでに2年次の選択科目を決めなければなりません。そこで、本校では、生徒に『栄冠めざして』（河合塾）などを配付し、興味関心のある学部・学科や、「R-CAP」で適性があると判定された学部・学科について調べさせます。そしておおよそ学びたい分野が決まったら、大学を意識しつつ、入試科目を調べさせて、科目選択につなげています。

—出前授業やオープンキャンパスの際には、どのようなアドバイスをされていますか？

分野別の講演会や大学教員による出前授業といった行事もありますが、2年次や3年次には、大学のオープンキャンパスにも行くように促しています。その際、私は、オープンキャンパスでは必ず個別相談に行って、大学の先生と直に話してくるように言っています。

そして個別相談のために、質問を20か30、最低でも10個は考えるよ

うに言い、さらに、ホームページやパンフレットを読めば答えがわかるような質問はだめだと言っています。質問は、志望大学以外の大学のパンフレットも取り寄せて、同じ系統の学部を見比べて、両校の科目の違いなどから考えるとよいとアドバイスしています。たくさん質問を考え、そして大学の教職員に直接聞くことで、生徒は大学への理解を深めていきます。

また、志望理由書や入試の面接では、大学の先生に直接いろいろな質問をぶつけた上で、その大学で学びたいと思ったことや共感したことを書いたり答えたりするように指導しています。

そして、オープンキャンパスでもその他の機会でも、大学や大学の先生にお世話になったら、ハガキでよいので必ずお礼状を書くように勧めています。せっかく得たご縁ですから、まずお礼状を書いて、その後質問があったときなどに先生に連絡して教えを請うと、大抵アドバイスしていただけます。

ただ、お礼状を最初から独力で書くのは難しいので、3年生に配付しているキャリア通信に、お礼状のサンプルを掲載するなどサポートしています。

——大学や学部・学科を調べるだけでなく、自分からアプローチすることが大切なのですね。

そうですね。ほかにも前任校では、修学旅行で沖縄に行ったことをきっかけに、沖縄の大学を志望した生徒がいました。その生徒は、志望校は沖縄の大学だけれど、自主的に東京の大学の沖縄に関するゼミに定期的に参加させていただいたり、沖縄出身者が多く住み、沖縄関係の商店が

多い横浜市の鶴見に出かけていたりしていました。この生徒は第一志望校に合格することはできませんでしたが、将来につながる良い体験になったはずで、大学合格に向けた学習だけでなく、その先につながる学びをすることが、本当の進路学習だと思えます。

学校全体でのAL型授業とリーダーシップ教育でジェネリックスキルを育成

——直接的な進路指導以外で、大学合格のその先につながる学びを意識されていることはありますか？

教育活動の中で最も大きな時間と比重を占めるのは授業ですから、授業の中でいかにキャリア教育を行うかが、とても重要です。そこで本校では、学校で組織的にAL（アクティブラーニング）型の授業を取り入れて、学習の深化につなげるとともに、コミュニケーション能力、課題解決力、課題発見力など、社会に出てからも必要とされるジェネリックスキルを育成しています。

ちなみに、私がAL型授業を始めたのは、2011年に本校に着任したのがきっかけです。本校は90分授業のため、生徒は授業時間中集中し続けることが難しく、何かしかがけが必要だと感じていました。私自身も、自分の授業がマンネリ化していると感じていました。ちょうどそのころ、勉強会でALに出会ったのです。

当初私ひとりでALを意識した授業を行っていたのですが、仲間を見つけて意見交換をするうちに、学校全体で導入した方が気づきがあって面白いし、生徒の力も伸びると考えるようになりました。そこで神奈川県「県立高校教育力向上推進事業

Ver.2」に応募して指定され、2013年度から、組織としてALに取り組むようになりました。本校の特色は、ALの手法は決めず、各教員が自分の持ち味を活かして授業を行い、互いに見学し合うことで各自の授業改善に活かしているところです。2016年度からは県の「授業力向上推進重点校」に指定され、引き続きAL型授業に取り組んでいます。

——授業以外ではいかがですか？

2016年度からは、ALに加えて、リーダーシップ教育にも取り組んでいます。私は、2015年夏に立教大学で行われたカンファレンスで、リーダーシップ教育に出会いました。ここで言うリーダーシップとは、権限や役職をもった人、あるいはカリスマ性をもつ人だけが発揮するものではなく、権限のない人を含めた全ての人が発揮するものです。日本でこのリーダーシップ教育を牽引する一人、早稲田大学の日向野幹也教授によると、権限のないリーダーシップを構成する要素に「目標の共有」「率先垂範」「同僚支援」の3つがあり、各自がチーム目標を達成させるためにできることを主体的・積極的に力を行う力をリーダーシップと呼んでいます。

参加したカンファレンスでは、教育機関向けに教育プログラムの提供などを行う株式会社イノベストからの「大学の部活動にリーダーシップ教育を導入したところ競技成果に良い影響がある」との発表を聞き、すぐに本校で導入したいと思いました。ただし、授業でALに加えてたて続けに新しい取り組みを行うのは教員の負担も大きいと考え、また、本校は90%近くの生徒が部活動に参加していることから、まず部活動で導

入することにしました。

2016年度には、早速、株式会社イノベストと教育連携を結び、初年度は、バドミントン部、硬式野球部、吹奏楽部などいくつかの部活動で研修を実施し、導入を図りました。また、9月のスポーツ大会（球技大会）前日に半日とり、全校生徒を対象に研修を行いました。研修では、まず全員に対してリーダーシップについて理解を促し、その後クラスに戻って、種目ごとに分かれてグループをつくり、大会での目標設定、その目標をイメージした絵を描くビジョニング・ワーク、同僚支援のためのチームのキーワードを考えるといった活動を行いました。

——生徒に変化はありましたか？

研修直後には効果がありましたが、時間が経った後も生徒がリーダーシップを発揮し続けるには、継続して生徒に働きかけていく必要があると感じています。今年度は、リーダーシップ教育をほかの部活動に拡げていくとともに、AL型授業にリーダーシップ教育をリンクさせていく計画です。具体的には、学校設定科目として、1年次前期の必修科目に「みんなのリーダーシップ入門」を設け、コミュニケーション力やプレゼンテーション力、チームで協働する力などを育成しています。

私は現在、授業の振り返りシートに「リーダーシップを発揮することができましたか」「今日、グループ（クラス）内で最もリーダーシップを発揮していた人は誰ですか」などについて理由とともに書かせて、リーダーシップの浸透を心掛けています。生徒たちが「目標の共有」「率先垂範」「同僚支援」という言葉を使うようになったほか、率先して動

いたり、仲間を助けたり、チームを引っ張るだけでなく下から支えるなど、自分なりのやりかたでリーダーシップを発揮できるようになってきたかなとは思いますが、まだまだこれからですね。

保護者も教員も コーチングの感覚で 生徒自らの進路選択の サポートを

——高校生の保護者には、子どもの進路選択についてどのように関わってほしいと伝えてありますか。

高校生は保護者から自立する時期であり、保護者も徐々に子離れしていただきたいと伝えています。進路についても、情報を子どもと同じくらいもっている必要はありませんし、たとえ多くもっていたとしても、子どもにあえて質問してみるなど、コーチングの感覚で接すると良いと思います。他方、本人の自主性を尊重していると言う保護者の中に、単に子ども任せになっているだけのケースがあります。これも、コーチングのような形で問いかけをしながらコミュニケーションをとっていくと、子ども自身、自分と向き合うきっかけになります。あとは、やはり受験や進学費用についても把握しておいていただきたいですね。

——最後に、小島先生が生徒に接するときに気をつけていることはありますか。

保護者へ伝えていることとも共通しますが、私はコーチングの勉強をするようになってから、生徒から進路に関する質問をされても、「何を調べたらわかると思う？」などだけで質問で返し、「わかったら今度教えて」などと言っています。教科



の授業も同じですが、生徒は自分で答えを見つけたほうが達成感を感じることができます。

あと、生徒によく言うのは「行ける大学ではなく行きたい大学を選べ」ということです。1回きりの人生なのでそんなに簡単に決めないでほしいですね。高校時代は、自分の在り方や生き方をとことん考えることが重要です。そのためにも、私は生徒に安易に答えを教えないよう心掛けています。教員は教えるのが大好きですし、私もつい教えてしまっただと反省することもあるのですが、何事も生徒が自分自身で答えを見つけられるように支援することが大切だと思っています。

また、個人的には、進路指導やキャリア教育の結果が大学合格実績に結びつくかどうかにはあまりこだわっていません。肝心なのは、生徒がどの大学に行くかということより、高校で学んだことが役立ち、社会で活躍できる人材になることです。そのためにも、総合的な学習の時間、各教科の授業、特別活動等、学校での教育活動すべてを通じてキャリア教育を充実させていきたいと考えています。